

(活動報告)

教育虐待，教育ネグレクトを知っていますか？

渡部真奈美¹⁾

I. はじめに

筆者は2016年9月に着任し、3年目を迎えている。当初は、1期生の臨地実習の準備等に忙殺されており、日々の業務に追われる毎日であった。

現在3年目を迎え、少し時間的な余裕もできるようになった。改めて、ほとんど研究活動をしていなかったことに気づき、これまでの歳月を振り返りながら、現在筆者が関心を寄せていることを整理してみたいと考えた。

そこで、2018年度多くの学会や研修会に参加し（表1）、新たな知見を得ることができた。大学教員になり、約20年を迎えるが、一貫して「児童虐待」について関心を持っていた。とはいうものの、実際に研究を十分に行ってきたとは言い難く、昨年度から、「宮田奨励金」の研究資金の援助を受けながら、細々と活動を開始している状況である。

2018年に参加した学会で特に印象に残っている学会は、12月15日～16日に開催された「日本小児精神神経学会第120回記念大会」であった。大会のテーマは、「子どものトラウマ～再認識されるべき心の問題～」で、日本においては、子どものトラウマを学術集会の主題とした学会はほとんど見られず、その意味でも大きな意義のある学会であった。特に、会長講演は「教育とトラウマ」と題して行われ、初めて「教育虐待」の存在を知ることになり、インパクトを受けたので紹介したい。

表1 2018年度参加学会

日時	名称	場所	経費負担
4月20日～22日	第121回日本小児科学会学術集会	福岡国際会議場	学科目費
8月5日・6日	第10回日本子ども虐待医学会学術集会	サンポートホール高松	学科目費
8月28日・29日	第28回日本看護学教育学会学術集会	パシフィコ横浜	学科目費
12月15日・16日	日本小児精神神経学会第120回記念大会	日本消防会館（ニッショーホール）	宮田奨励
2019年3月17日～19日 （予定）	日本発達心理学会第30回大会	早稲田大学戸山キャンパス	宮田奨励

II. 教育虐待，教育ネグレクトの概念

1. 虐待の概要

教育虐待，教育ネグレクトについて述べる前に、まず「虐待」について簡単に整理しておきたい。

虐待という言葉は、昨今では日常的に見聞きするようになってきている。「児童虐待」というニュースや報道によれば、児童相談所への通告件数は右肩上がりに上昇し、13万件を超え、27年連続増加している（厚生労働省，2018）。

虐待とは、児童虐待のみならず、障害者虐待，高齢者虐待，動物虐待など、弱い立場・保護下におかれている人（動物等）に対して、不当な行為を行うこととされている（古荘ら，2015）。児童虐待防止法では、虐待は大きく4つ、「身体的虐待」、「性的虐待」、「心理的虐待」、「ネグレクト」に分類されている。また、

1) 朝日大学保健医療学部看護学科（小児看護学）

障害者虐待には、「経済的虐待」が加わる。しかし、「教育虐待」，「教育ネグレクト」という言葉は（定義）は，法律には入っていない。

2. 教育虐待，教育ネグレクトが注目される背景

それでは，なぜ教育虐待，教育ネグレクトについて考察するのか。「日本小児精神神経学会」の会長講演「教育とトラウマ」において，宮本（2018）は，次のように述べている。「子どもを教える立場にある職種（教諭やスポーツコーチなど）の人たちや子どもの教育に責任を持っている立場の人たち（保護者や教諭など）による子どもへの指導内容や指導行為が，子どもにとって不適切となっており，結果として子どもにトラウマを生じることもあり得るのではないかという問題意識が背景になっている」。

昨年来，スポーツ界において，パワハラの問題が数多く報告されているが，そこには，「行き過ぎた指導」に代表されるように，指導する側の熱心さが，かえって子どもたちを追い込んでいる現状が見え隠れしている。

家庭においては，親が良かれと思ってしていることが，子どもにとっては負のメッセージとなって受け取られたり，子どもの気持ちよりも親の欲望のために優先されたりすることもしばしばみられている。同様に，教育の現場においても，意図的ではなくても，虐待，もしくはネグレクトに相当することが起こり続けているのではないか。

つまり，親や教育者が善意でしているつもりでも，子どもにとって有害であれば虐待と判断されるのである。

日本で最初に「教育虐待」という言葉を用いたのは，武蔵大学の武田信子教授（教育心理学）と言われている。2011年12月に開催された日本子ども虐待防止学会17回学術集会において，「子どもの受忍限度を超えて勉強させることを教育虐待とし，教育の名のもとで親のいいなりにさせられるケースはもちろん，親の所得格差が子どもの学習権に大きく影響する状態も教育虐待に含まれる，と報告している。

3. 子どもの自尊感情について

OECDや古荘（2009）の報告にみられるように，日本は他の先進諸国に比べて，「自尊感情」が低いことが指摘されている。自尊感情という言葉は，英語の「セルフ・エスティーム（self-esteem）の訳語であるが，厳密には，「自己に対する肯定的あるいは否定的な態度」という意味である。自分のことを自分でとらえるという概念には，ポジティブな思考をさすだけではなく，ネガティブな側面包括した概念である。日本では，ネガティブな側面をとらえ，「自尊感情の低さ」が指摘されることが多い。

日本の子どもの自尊感情が低い要因を，古荘（2009）は4つに整理して述べている。

- 1) 集団のなかで我慢を強いられること
- 2) 硬直的な学校制度
- 3) 一方的でそれぞれの発達の差を無視した一律な授業体系
- 4) 減点主義・相対主義の評価による達成感の欠乏

上記のうち，3と4について，看護教育における課題について，私見を述べる。

Ⅲ. 看護教育における課題

前述した事項について，簡単に私見を述べたい。まず，3)については，大教室における一方的な知識伝達型の授業形式が挙げられる。学生との対話のない，一方的な授業は，学生にとって退屈なものとなることは予想される。発達の差というより，むしろ理解力の差は，歴然としている。様々な入学方式によって入学してくる学生は，初年次から「差」があることが明白である。それにも関わらず，一律の授業体系では，落ちこぼれる学生がいることは避けられないものとなっている。

また、過度に厳しすぎるまたは、過干渉であることも、学生の自立性を妨げる要因となっている。自尊心が低いまま、大学入学後も自信が持てない学生が増えているのも現実であろう。減点主義・相対主義の評価は、さらに自尊感情を低くすることに拍車をかけてしまうだろう。

IV. おわりに

今回、教育虐待、教育ネグレクトについて概説した。本学に限らず、多くの看護系養成機関において、中途退学者が多く、いかに継続した教育をしていくことの重要性は言うまでもない。溝上(2018)は、大学生白書において、いまの大学教育では学生を変えられないというショッキングな報告をしている。

しかしながら、教員自身が、一人ひとり自己の教育観を見直し、学生主体の教育について考察することが、専門職育成のための喫緊の課題であると考える。

文 献

- 古荘純一(2009). 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか, 光文社新書. 古荘純一, 磯崎祐介(2015). 教育虐待・教育ネグレクト, 光文社新書.
- 厚生労働省(2018). 平成29年度児童相談所での虐待件数<速報値> 溝上慎一(2018). 大学生白書2018, 東信堂.
- 溝上慎一(2018). 大学生白書2018, 東信堂.
- 宮本信也(2018). 日本小児精神神経学会第120回記念大会抄録集. 山崎勝之(2017). 自尊感情革命, 福村出版.
- 山崎勝之(2017). 自尊感情革命, 福村出版.